

## 上賀茂社家町 社家住宅の普請について

永松 尚

### 1. はじめに.

賀茂川上流の流れが志久呂橋を過ぎてまもなく、堰により取水され支流となった明神川の流れは、上賀茂神社の境内に入り、御生所川、御手洗川と呼び名が変わり、御物忌川と合流したところで、その名を奈良の小川と変え、いにしえの名残を感じさせるがごとく優美で厳かな風情を醸し出す。さらに流れは境内を出たところで、再び明神川という名に戻り、石垣の礎の上に建つ土塀の横を屋敷ごとに架かる小さな石の橋をくぐりながら、この界限に清々しい情緒を残し、流れを東へ進めていく。— 冒頭からありふれた観光ガイドのような行で僭越であるが、多くの人を知る上賀茂社家町の町並みとはこのような風景ではなかろうか。ややもすれば、これらのビジュアル的なイメージのみが、かつて上賀茂神社に仕えられた神官の住いの遺構だということよりも印象として上まわり、況してやその後裔の方々や関係者の多くがその伝統と文化を次の世代に伝えるべく苦慮されているという問題など知るには至らないであろう。我々一般人が持つ“社家町”についての率直な認識は、“古き良き佇まい”といっても過言でない。はじめて寄稿させていただく私にいたっても職業柄、文化財保護法に基づく京都市の“伝統的建造物群保存地区”(＝伝建地区)に指定された“守られた”地区という認識が更に強かった。

私が、この当誌に寄稿させていただくことになったのも、この“職業”が所以である。一昨年、建築の設計を生業としている私のもとへある仕事の相談が届いた。数年前からごく稀に古い和風建築に係る改修などのプロジェクトに接する機会を得るようになった私だが、京都で長年、数奇屋建築を手がけている大工、左官などの職人諸氏と、小さなグループをつくり勉強会的な活動を共にすることで、伝統的な和風木造建築に関する技術、及び知識についての向上を図っている。仕事を通じて、設計と施工というそれぞれの立場で意見を交わしながら“温故創新”を目指す職人チームである。相談は、この職人チームを通じてのものであった。

場所を尋ねると、上賀茂神社の近く、社家町の中の邸宅のひとつの改修工事という。これが私たちの社家町との係りの始まりだった。

依頼主は、運良く社家町の屋敷のひとつをご購入され、そして改修を計画された。近年特に、京町家や古民家を購入し、今の時代の暮らし方にあうように一部を改修するというのが脚光をあびている。私自身も非常に興味を持っている。しかしながら、スローライフやエコといった生活様式やサステイナブル、低炭素社会への貢献などと、聞こえと見栄えのよい言葉がメディア上で飛び交うが、実はそう容易いことではない。しかもここでの対象は、京都にいながらにして見慣れた町家ではない。“社家”なのである。あえて言えば、建築の分野では町家ほどあまりよく知られていない社家住宅であり、伝建地区に位置する古い社家建築なのである。

このことは、私たちが危惧するまでもなく、むしろ施主のかたが十分に理解され、ある種の覚悟をもって臨もうとされていた。伝建地区であるが故、外観に手を加えることはできない。不自由であることは言うまでもない。古いものの良さを感じ取りながら、著しくその機能を失った部分を改修し、伝統的な景観を守り、その一方で、慣れ親しんだ近代的な生活スタイルを否定することなく、出来る限りの快適さと安全性は確保しなければならない。これは施主の要望でもあり、建築の設計という分野においては、それらを追求することは常識的な意義でもある。「何が可能か、何が大切か考え、安心、安全に大切に自分たちが住まうことで、この建物を次の時代へ残すことにつなげたい。この家のこれからの何十年かをたまたま私たちが住まわせてもらうのです。」施主が述べられた強いこの言葉が、以後、現在までの作業の全てを象徴することになった。

## 2. 社家住宅へのアプローチ

以上のような経緯で施主と私たちはゆっくりと時間を費やししながら、社家町という歴史ある町並みのなかで、この家の改修をどうすべきか話し合いを重ねていくことになった。過去に住まわれたかたがたが残されてきた古いこの家を新たに住まう者によって手が加えられる。問題山積であり思案がつづく。その中で私たちが注視したのが、“社家のかたち”とは何かということであった。正確には“社家住宅のかたち”、或いは“社家建築のかたち”とは、である。

“社家住宅”の特長と言えば、この後の章でも触れることになるが、貴人用の式台玄関と鳥居の形をした玄関、柱と貫が目立つ妻壁などが特長であるなどとのことは読者の御兄弟を前に今更言うまでもない。既に多くの文献、書物等にも記されている。そして町並みの観点から考えると、安易で恥ずかしい限りであるが、冒頭の観光ガイドのような行に行き着くわけである。

ところが、その安易な認識のなかで当初から疑問を抱いていたことがあった。私だけでなく当事者の全員がである。

それは、「この屋敷には橋がかかっていない」ということであった。明神川に面した敷地に建つ他の屋敷のいずれにも、形態は様々であれ小さな橋が架かっている。冒頭では石の橋と記述したが、コンクリート構造でその表面のテクスチャーは風化したモルタルのようであったり、下地補強の鉄骨が見えていたりしているものもあるが、草が生えるなどの風情を持ち合わせ、固有の景観形成に寄与しながら、建物へのアプローチといった根本的な機能を有している。



ところが、私たちが機会を得たこの屋敷には橋がない。なぜなのだろうか。側面が南北方向の道路に接しているからかとも考えたが、道向いの屋敷も別の通りに面した敷地の屋敷も皆、

橋を有している。では、単に川に面した間口の問題かとも考えたが、的を得ていない。その上、川に接する境界線に土塀もない。この屋敷は、石垣の上に施された竹垣と植栽によって道からの視線を遮断している。

この屋敷は社家町にあつて社家ではなかったのではなかろうか、即ち社家住宅ではなかったのではないか。次第に疑問が大きくなる。

調査を行うと、2階部分が増築であるということは、全体のプロポーションを見れば一目瞭然である。プロポーション以外でもさまざまな部分からそう判断できる。一方で、もともと平屋であった部分の一部については、かなり古い状態のまま現在まで残されてきたような印象についても調査に加わった者全ての見解が一致するところである。このことは、後々興味深い発見につながる。

いずれにしても建設当初は平屋であったことは確実で、その時期がいつごろだったのかを知る必要がある。しかし、古い木造建築物の由緒沿革を求める場合に大きな手がかりとなる小屋裏の棟札がここでは存在せず、また参考となる建設当時の古文書を探そうとするが、そのようなものが収蔵されていそうな蔵も存在しない。あればとくに資料化されていることであろうから当然でもある。

法務局に保管されている旧土地台帳によれば、明治後期から大正にかけて土地の分筆が行われたことが確認できた。これらのいずれかの時期に増改築が施されたということは考えられそうだ。

身近な資料探しと目視のみによる調査としては、このあたりまでが限界である。

「この屋敷は社家だったのか」、ということから「社家住宅とはいったい何か」まで、漠然として単純ではあるが、逆に深すぎる疑問でもある。戸惑いながらもはじめのうちは、好き勝手に推測し、議論していた私たちであったが、当然、何の解釈も結論も見出せない。いっそのこと改修プロジェクトの見せ場として、橋を架けてはどうだろうという意見にまで達した。厚顔無恥も甚だしいものである。

このような最中の昨年、私たちのグループの一人による精力的な資料収集の結果、“賀茂文化研究”という冊子を手にする機会を得た。そしてこのことが、梅辻家当主である梅辻諱氏とお目にかかる機会に至ったのである。さまざまな多くの貴重なお話をお聞きすることができた。私たちが直面している屋敷も社家であるということも教えていただいた。しかし安堵はできない。「では、なぜ他とは構えが違うのか。」依然として疑問は残る。

更にさまざまなお話をお聞きした。社家の後裔の方々のご苦労などもお伺いすることができた。建築家として、技術的、学術的なことだけでなく、そこでの培われてきた日々の営みの歴史について触れることも貴重な機会である。少しずつではあるが私たちが学ぶべき方向性が明らかになるように覚えた。

そして、社家町と社家住宅について、知識を広げる絶好の機会をいただくことになった。折りしも、梅辻氏ご自身も予ねてから社家の建物に関する調査研究の必要性を感じて止まなかったとのことで、現存する社家住宅のいくつかに梅辻氏より声をかけていただき、互いに見識を

広めるという意味で、私たちも一緒に拝見させていただけることになったのである。

上記のような経緯によって、まずは、平成20年秋より「梅辻家住宅」をはじめに「山本家住宅」「岩佐家住宅」「井関家住宅」の4軒の見学が適った。更に年が明けて平成21年春より「津田邸」、「藤木邸」の2軒を見学させていただいた。いずれも、写真撮影の許可を得た上に、当日はお住まいのご主人がたにご丁寧な説明をいただいた。

見学は、前述の私たち職人チームのメンバーが、所有者の方々の説明に耳を傾けながら、自分の好き好きに写真を撮り、寸法を測り、後日、それらの写真をプロジェクターで投影しながら、見解を述べ合うといったもので、私たちは、決して建築史的観点を主とした学術的な調査を目的とはしなかった。あるレベルでの実測調査等は既にあらゆる専門家、研究機関によってなされているということを考え、私たちは、“普請”という観点から、あくまでも半世紀近くの経験を持つ大工を中心とした現代の職人衆の目をとおして、今に伝わる何かを探り出すということに絞った。

次章よりその一部について書き述べてみたい。書きまとめる私個人は、浅識な部分もまだあり、誤った認識、解釈があれば、お読みくださる諸兄姉によるご指摘、ご教示をお願いしたい。

### 3. 梅辻家住宅

「賀茂七家」のうちのひとつ、昔ながらの屋敷構えを残したものである。京都市指定有形文化財である。建築時期については明確でないものの、祈禱札に記された天保9年(1838)がその時期ではないかと解説されている建物である。

藤の木通りに面した長屋門から邸内を覗くと、正面に入母屋造りの屋根が架かった式台玄関が見え、その右上には本棟(居室棟)の妻壁が見える。白い漆喰壁に柱と貫を表して象った意匠が、社家住宅であることを印象づけている。更にその右手、東側には一変して反りを持つ屋根が架かった書院造りの棟が続き、これらの連年のコントラストが優美、かつ荘厳で美しい。



長屋門から見る

御所の御学問所が移設されてきたとされるこの書院は、長屋門から式台へ向かう右手の中門を通りぬけ主庭に入るとその全貌を見ることが出来る。

見上げると反りに合わせて施された瓦の並びが美しい。屋根は当初は檜皮葺きであったが、後世になり瓦葺きに変えられたものであると説明を受けた。破風に囲まれた妻壁には、木連(きづれ)格子が施されている。因みにこの格子の造作については、文献等によっては、「狐(きつね)格子」と書かれている場合もある。細い木を組み合わせで大きな面を構成しているので「木連」だと、大工仲間ではこう呼ぶらしい。音にすると似ているし、それぞれの呼び方の所以も一理あるところが、伝統的な日本の“普請”文化の妙でもある。



軒に目を下ろせば、南東隅の軒先から長い樋が突き出ている。樋自体は後年になり施されたに違いない。現代数寄屋建築などでは鎖樋などが設けられていることもよくあるが、この手法は、水が跳ね建物を濡らすことを避けたかったのか。更にこの樋の先端の真下にあたる地面には雨落しが設けられている。だが、そこから先に排水の溝などは見当たらない。後にも出てくるが、社家の敷地は、全て水捌けがよくなるように土木的な工夫が施されているという。

また、大工の一人から興味深い指摘がなされた。書院の南面から東面にかけて吹きさらしの縁側廊下が巡らされているが、そこに水勾配がつけられているという。床板を壁と平行に張った樽(くれ)縁と呼ばれる形式である。切目縁と呼ばれる寺院の一部や住宅の濡縁などに見られる床板が壁と垂直に張られている場合であれば水勾配の施しが考えられないこともないが、樽縁においては珍しいと思われる。現代数寄屋でも稀に見られるというが、いずれにしても、檜皮から瓦に葺き替えられた経緯を考えると設計の立場としては、重さによる建物全体の歪みや沈下や移築による影響なども含めた経年変化の検証も必要である。だが、この道半世紀近くの大工の目は、確かに水勾配が施されていると断言した。確証が得られれば、側柱の通りに壁や雨戸がないことのかわりの措置として、この時代において配慮がなされた普請といえる。

この書院の外部廻りには、さらに見所がある。縁側廊下に面した入側柱の通りの障子が貼られた板戸の引手にあたる部分である。腰の横棧の上2本を跨いで被せるような形で板金装飾が取り付けられている。引手、取手のとしては決して実用的な形ではないが、長押に打ちつけられた釘隠しと同様に格式を感じさせる。御所時代を偲ばせるものなのか。精巧な紋様が刻まれており、その意味など今後調べてみたい。

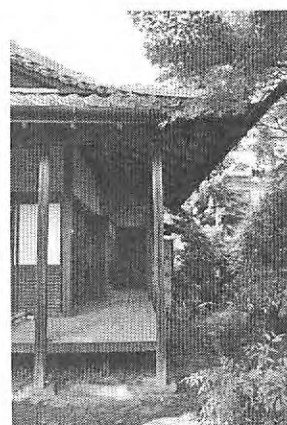
本棟に戻る。南面正面の式台玄関の間口は内法でほぼ正確に3m。和風建築には珍しいモジュールである。

西側に廻ると供待ちが設けられ、その隣の玄関は檜の材を用いた鳥居の形を成している。即ち、社家の独特の構えを有している。しかしながら冒頭の門が長屋門であることは、周りに薬医門の構えが多い社家の町にあつては、往時の象徴のようでもある。

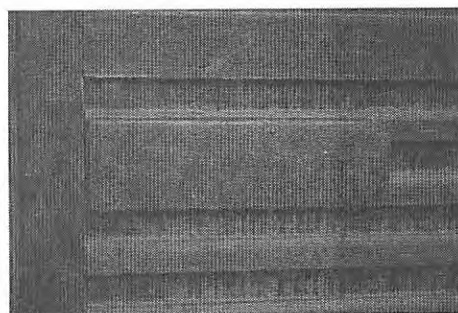
内部を見る。書院には座敷と奥の間があり、座敷には、賀茂季鷹の聯が掛けられている。奥の間では、床の間と付書院などが文献等に記されているため、私たちも注視。面皮柱を用い



突き出た樋と雨落し



縁側廊下



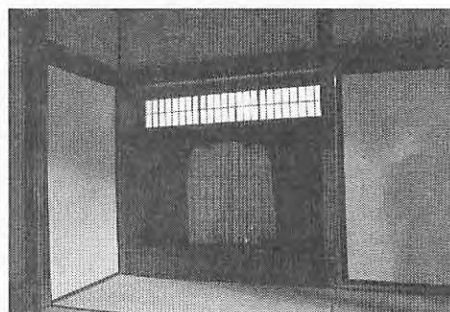
板戸の引手

ていることから、数奇屋風書院造りと呼ぶに相応しいだろう。

大工職人の諸氏が、ここでは独特の着眼点を示してくれた。床の間の奥行き浅さ、面皮柱と地板の納まり寸法などの位置関係である。特に面皮柱については、根元の太い部分を削り成形するが、その削られた部分の形についての見方である。懸垂曲線にも似た細い円錐のようなこの形の部分を“タケノコ”と呼ぶらしい。寸法形状に詳細なきまりごとはないが、この“タケノコ”の高さと巾に職人個々の美学を感じる貴重な仕事の跡ということである。

また、付書院の花頭窓のプロポーションについては、他の寺院等で見かけるそれよりも縁取られた形の裾の部分が垂直に近く、比較的古い形ではないかと想像するが、絢爛さを感じさせる柔らかさよりも、逆にモダンな印象を受けた。

さらに興味深い点としては、“床差し”の天井である。現代では忌み嫌うため、この後、強い関心を抱くことになる。

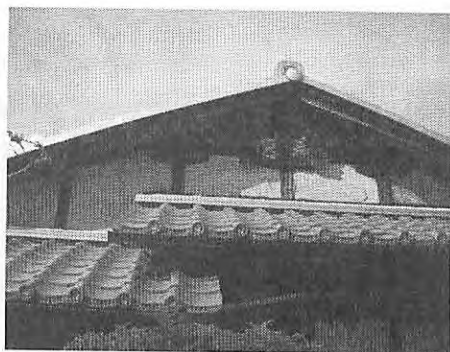


書院花頭窓、左端床柱にタケノコの形

#### 4. 山本家住宅（雲錦亭・歌仙堂）

予め、かなり古い建物であるということを知らされて見学に望んだ。歌人であり国学者でもある賀茂季鷹の旧居である邸宅は、寛政13年(1801)に“雲錦亭”と呼ばれる住居が、文化8年(1811)に“歌仙堂”がそれぞれ建てられたと伝えられている。

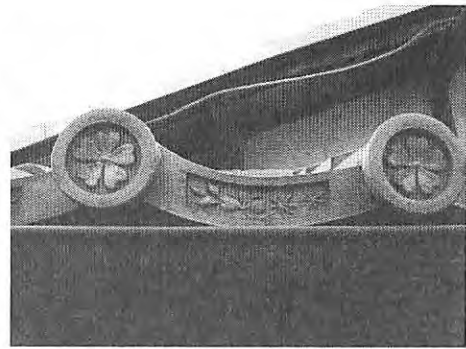
薬医門を通り抜け、先ずは雲錦亭を見る。正面に見えるはずの式台は、既に機能を変え、改修により腰窓を持つ壁に変わっていた。しかし左手には小振りではあるが鳥居の形をした玄関の姿があり、また見上げる柱が強調された妻壁が見える。下屋との納まり上、貫を複数本通すには高さがたらず変則的ではあるが、社家の体裁には間違いない。その代りに柱の頂部に梅辻家では見られなかった船肘木が設けられている。寺社建築で目にする部材であるため、職人諸氏の興味が向けられた。今まで住宅建築では気にすることがなく、考察する必要がある。



雲錦亭—舟肘木が設けられた妻飾り

また、この妻壁部分の左官仕上げの部分には、少し色が含まれている。どちらかというと土塀に近い。左官職人の言葉を借りれば、“きりかえし”という土壁仕上げの手法のひとつのこと。中塗で終え、もともとは費用対策として講じられたようであるが、あえてコテ斑を残すなど、現代でも使われる手法という。

瓦の紋には桜の図柄があり、また垂れの部分には紅葉の図柄が施されている。賀茂ゆかりの二葉葵ではない。この雲錦亭が建築された際に、吉野山の桜と龍田の紅葉を移植したとあるが、このことに因んだものであるとの説明を受けた。可愛らしい瓦ではあるが、今となっては補充が大変であろう。



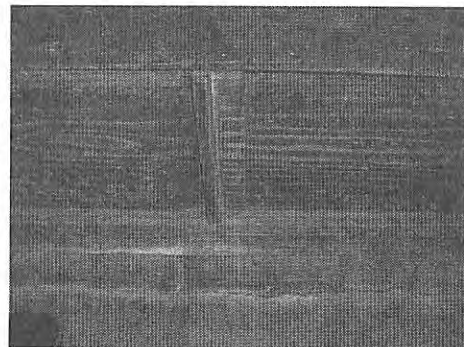
桜の紅葉の図柄の瓦

玄関脇の腰壁に関しては、大工職人の諸氏が下見板の枚数に着眼した。現代の数奇屋建築では、奇数枚を重ねることが一般的であるが、ここでは4枚。玄関が小振りに思えたようにこの付近の壁の絶対高さが低い理由もありバランスを調整されたのだろうか。下見板張りの腰壁と漆喰の壁の比率も特に違和感もなく、きれいに構成されている。

以上のように外廻りを見る限り、社家の体裁を保ちながらも普請においては、部位ごとに個性ある作風が強く感じられる。

内部に移る。東側の主庭に面して、手前南側に座敷8畳、北側に奥座敷が配置されている。前回と同様に、床柱のタケノコ寸法などをチェックすると同時に、それ以上に奥座敷の内装表具類が、かなり年月を経た由緒ある様相を示しており、これらの保存についての取り組みの必要性を強く感じる。ここでも天井は床差しで普請されている。

玄関土間では、価値のあるものを見ることができる。上り框の下部が収納できるように扉が設けてあるが、その足元に整然と並べ敷き詰められた石の基礎である。“差し石”と呼ばれ、茶室や数奇屋建築でよく見られるものである。現在ではゴロ太石と呼ばれる丸みを帯びた石を用いた例が多いが、ここの例は、亀石とよばれる扁平で矩形の石である。しかも人工的ではなく、川の流れによって成形されたものであるために貴重であり、現在では極めて入手が困難と言われている。近づいてみるとその表面の色、艶、形からして自然なものであることを確認できる。賀茂川で採取された石であろう。目立たないところではあるにも係らず、当時の作り手の精神のようなものを感じた。丁寧な仕事である。



亀石による“差し石”

主庭には池が設けられている。これは鏈水である。従って傍を流れているのは明神川である。敷地を貫いていることには驚かされる。以前は明神川を渡った北側の空地にも屋敷が建っており、老朽化により崩壊したという。歌仙堂は、その同じ北側の東角に建立されている。

銅版平葺き入母屋の屋根をもつ御堂は、幾度と修理



歌仙堂

を加えられているようであるが、正面の格子扉、竹格子を組込んだ側面の花頭窓風の地窓など、小さいながらも表情豊かである。

説明によれば、主庭の鑑水では昔、曲水宴が催されたそう。主庭の南端から明神川越しに歌仙堂や今は無き屋敷群を見渡した往時の風景は、きっと優美なものであったのだろう。

同時に、庭の広さはそれを囲む土塀の普請だけでも大掛かりであったことを推測する。

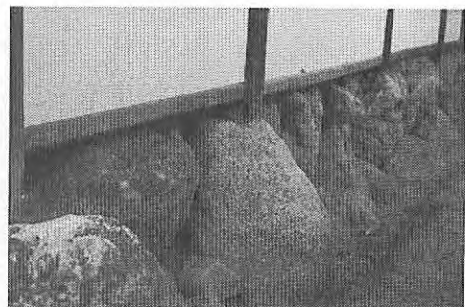
## 5. 岩佐家住宅

主屋、土蔵、門、土塀、及び庭園というべき主庭が残る遺構は、京都市指定有形文化財、及び指定名勝に指定されている。記録をおさらいすると、土蔵が最も古く江戸中期宝暦14年(1764)に建築され、その他も天明5年(1785)にほぼ現在の配置ができあがり、文政7年(1824)に屋根のみが現在の切妻屋根の形に改修された。また、敷地が拡張された天明2年(1782)に主庭としてほぼ整えられたとある。南大路町の南端に位置し、これは社家町のおおよその南端ともいえるのではなかろうか。前2軒との比較や近隣を歩いた上で感じた限り、道路と敷地との高低差が最も大きいと思われる。表門をくぐる際に実感した。道を歩いている限りあまり感じないが、賀茂川流域の土地の勾配と関連があるのだろうか。

前庭に入ると直ぐ右手に池の跡がある。清めの水であったと説明を受けた。左手の中門から側庭に入り、更に南に進むと主庭である庭園を望む。池に向って再び高低差が設けられ、水面がかなり低く感じる。この池が、今は暗渠となっている明神川支流から取水した鑑水であることを考えれば当然と言えよう。ということは敷地の高低差は、観賞用の庭園であるもの、散策の際に園池を劇的に見せるため人工的なアンジュレーションによる造園手法をとったものなのか、或いは明神川支流や近くを流れる賀茂川の増水に備えたものなのか更に興味が深まる。

この池の護岸の石組みについては、かなり高度な技術で普請されている状況が植木職人より解説が成された。池の周りに配置されたそれらは、一見するとそれぞれ大きな岩を置いているだけのようであるが、その下に細かな栗石が敷き詰められているという。これによって不同な沈下を防ぎ、動きのない強固なものになるという。建築の基礎と同様の考え方である。ご当主より東側の護岸の基礎がザリガニの繁殖による巣作りか何かで塀際が崩壊に至り、補強工事を要したことも明かされたが、近年における外来種の仕業と思えば、当時の普請は的を得たものとして評価される。

この主庭の西側に離れが建っている。本棟と渡り廊下で結ばれ、比較的新しいとの説明を受けたこの離れの床下廻りも個性ある表情を持つ。山本家雲錦亭の土間に見られた細かで繊細な差し石とは正反対の巨大な岩が床下に敷き詰められ、それらが柱の礎石ともなっ



離れの床廻り



ている。大胆な造りである。渡り廊下の床下辺りには、亀腹と呼ばれる加工が施されたものと思しきものもある。更に付近を見渡すとこの離れと土蔵との隣棟間においては、足元から石組みとも犬走りと思える部分が基壇のように張り出し、残された狭小な土の部分が水路のようにも見受けられる。これらは、増水などに対する優れた配慮と解釈してよいのだろうか。造園土木という観点から更に詳しく調査考察したい。

建物に話を移す。表門から見る表情は供待ちを脇に控えた鳥居の形の玄関と、漆喰塗りに柱と貫で飾られた妻壁の組み合わせで、社家特有のものであるが、その象徴的な妻壁は貫の本数が多く壮大な意匠である。

内部は、一部屋ではあるが、伝統的な厳かな空間のなかで現代の生活様式に適合させた工夫の跡を見せていただいた。ひとつの可能性を示すものである。

玄関から座敷へ進む。座敷西側の5畳ほどの“脇の間”は、天井と壁の納まりが面白い。この部屋は畳廊下のような趣も感じる。

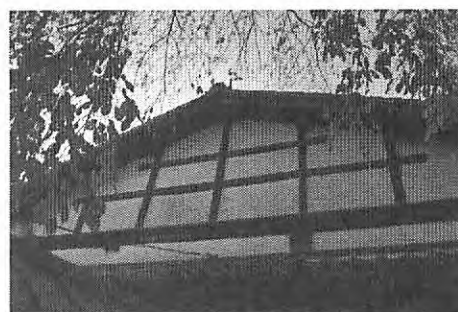
座敷は、前の2軒とは若干床の間の奥行きが大きく感じるが、天井はやはり床差しである。この岩佐家には室町時代以降の史料が残されていると文献等の解説にあるが、見学させていただき際も、人気を博した当時の大河ドラマを連想させるものを床の間で目にする機会を得た。

さらにこの座敷は畳を取り除けば、能舞台にもなるという。主庭に面した渡り廊下や座敷西側の土蔵との間の中庭に面した濡縁廊下などを合せて平面的に見れば理解することができる。また、池の南側から座敷を見渡せば更に納得できる。池に向って入母屋屋根を有する座敷部分は、能舞台を十分に意識できる。往時、観る者は池の上に船を浮かべて、繰広げられる光景を愛でたのだろうか。

座敷の南は主庭に面した入側縁を持つ。この入側縁に前述の渡り廊下や濡縁廊下を加えると、この屋敷には3種類の半屋外領域を有することとなる。このことがこの屋敷の外部空間と内部空間を絶妙に一体化している要因でもあるが、大工職人諸氏らの興味も多く注がれた。



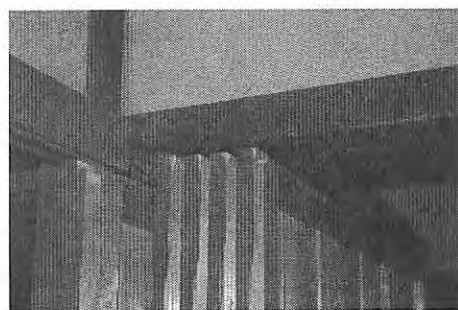
離れと土蔵に挟まれた水路のような庭



柱と貫が美しい妻壁



座敷と池が調和された空間



入側縁 雨戸の仕舞われ方

特に濡縁廊下廻りの意匠は丁寧な仕事というのが共通の印象である。また、この入側縁の側柱通りの戸袋を持たない雨戸格納の納まりは、優美な空間の中でこの部分だけが空間を合理的に用いた装置的な姿であり、特異でもあるが明快な考えとも言える。

その一方で、これら趣向と工夫を凝らした半屋外空間は、維持管理がより大変であり、将来に向けての保存、修繕といった場面では、技術的な意味で更なる工夫が必要である。

この入側縁から外部空間は、池の護岸まで水垢離で用いられたと言われる飛び石状の石段で結ばれている。能舞台としての眺めといい、建物と池を中心とした庭園がひとつの空間となった屋敷であると評される意味が十分に理解できる。

## 6. 井関家住宅（石水楼）

主奥そのものは、江戸時代中期、3階建ての望楼“石水楼”は明治初期によるもの。薬医門形式の表門や土蔵も残り、そのうち土蔵は、弘化4年(1847)と解説されている。

先ず、庭を見分する。昔、庭の奥には茶室もあったらしい。玄関前の中門は、曲がり材を用いた遊びごころを感じさせるものであるが、もしかすると茶室へのアプローチとして演出されたものであったのではというのが、私たちのイメージである。

この庭については、“竜の口(リュウノクチ)”なる仕掛けがあると、ご当主より説明を受けた。水はけをよくする土木技術であるという。社家の住宅の縁の下付近には必ず施されているものらしく、水に浸かったことで基礎や土台が痛んだ社家の屋敷はないとの説明である。梅辻家の庭で見た雨落しに排水溝が設けられていないということと同様のことであると思われるが、今でいう蛇籠のようなものだろうか。この技術は、古い時代に秦氏との交流によって手に入れたものだと言われた。賀茂氏自身がもともと土木的な技術を持っていたということも聞いたことがあるが、造園の専門家である植木職人氏は、賀茂川流域でもともとこのあたりが水はけのよいエリアであり、先人にはそれを見抜く目があったとも。いずれにしても悠久の歴史に満ちた話である。

建物は、式台玄関と鳥居の形の玄関を持ち、主奥の上に望楼“石水楼”がそびえ、南面にはやや変則ではあるが、柱と貫を表しの妻壁があり、社家特有の外観はここでも保たれている。

望楼の内部に移る。1畳分の空間に廻り階段が配置されている。階上から階下を覗くと扇の



望楼“石水楼”の外観



庭に設けられた竜の口

ように見える踏み板が重なって見える。美しい仕事である。

2階は、内装の一部が改装済みであるが、3階は内容が豊富で楽しい空間である。

まずは、三方を取り巻く硝子窓である。表面が平滑でなく波打った古き時代の磨き硝子が味わい深い。現在、市場になく入手が困難であるが、これまでの間にさまざまな暴風雨に耐えてきたという。今後も同様に願うところである。

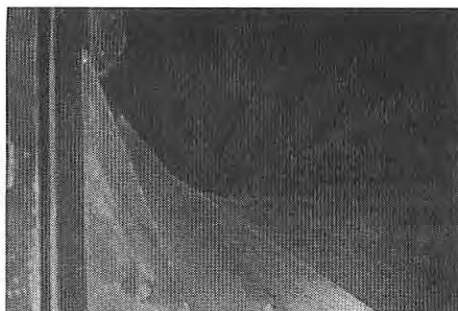
床の間の設えが瀟洒である。床柱が布袋竹で作られている。唐変木ではなく唐変竹とも呼ぶのか、その湾曲した造形を巧みに活かした見事な普請である。大工工事としての納まりはもちろん、この有機的な線を砂壁の中に鮮やかに浮き出るように塗りこまれた左官の普請も見事である。細い鏝を巧みに操れる腕を持っていたのであろう。

さらに床框は、出節アテ丸太の檜系の材を楔り仕上げによって凸面に象った造作である。色、艶、削られた表情など個性豊かなものである。まさしく数寄の世界と言える。独自に新たな道具や技術に挑む普請の跡は、明治期の日本が持ち合わせた活力ある気質の象徴のようでもある。

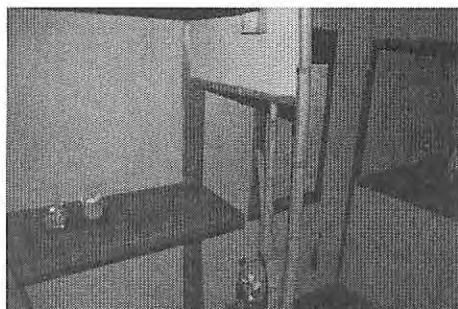
北側の窓の脇の管柱についても、その柱脚を鋭角に切り落としたまま、床から浮いたものとして見える意匠である。おそらく、切り落としたのではなく、切り欠いて壁を塗りこんだものと思われるが、これも遊びごころによる、挑戦するデザインであると感ずる。

1階の座敷は南向きで、奥行き浅い床の間は様式としては比較的古いことを意味し、その他にも美しい表装の襖などが特長であるが、最も多くの興味が注がれたのは、“平緒唐組”台という機織器の一種である。普請が主題であるため本筋ではないが、少しだけ記す。

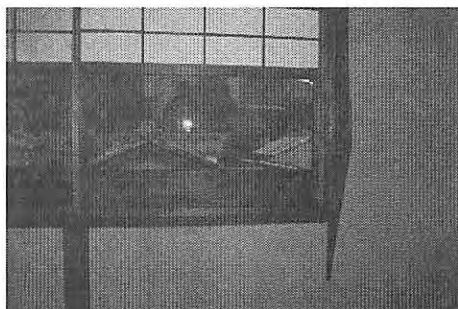
平緒とは、貴族装束に剣を下げる際に用いる帯状の紐であり、井関家は代々これを唐組みという手法で組まれてきた。ここで組まれたものが、15代将軍徳川慶喜の即位時にも身につけられた。この技術の継承者は、



3階へ向う階段



布袋竹による床柱



遊びごころ\_窓廻りの意匠



平緒唐組台

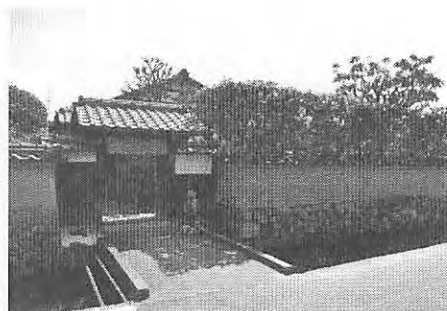


現在は全国で2名を残すのみという。伝統的文化の保存は容易ではない。

井関家がこれまで見せていただいた前の3軒の社家と大きく異なるのは、お店を営まれていることである。鳥居形の玄関より中の土間と式台奥の玄関の間に色鮮やかな手作りの匂い袋などの小物が並べ売られている。本来の用途を失った式台、とそこに隣接する部屋の活用例である。日常生活の場も岩佐家同様に社家の趣を損ねることなく上手く工夫されているようだ。これもひとつの可能性を示した例ではなかろうか。過去と現代の普請のコラボレーション的発想が多く求められる日もそう遠くない。

## 7. 津田家住宅

今回の私たちの一連の見学で唯一、藤の木通りから明神川を渡って入る邸宅である。橋は、既にコンクリート製に改修されているが、薬医門に通ずる軸線とそれに直交して連なる土塀とを併せた通りからの眺めは、象徴的な景観である。



明神川越しのアプローチ

やや、低く感じる門を通り抜けるとすぐに式台玄関を目にすることができる。井関家と同様にお店を営まれていることもあり、扉が開け放たれ玄関間と式台に

は、雑貨小物が置き並べられているが、床下を覗くと土台の下には、ここでも先の山本家邸宅よりはやや大きな亀石による“差し石”が施されている。

式台玄関の右手、西側に鑓水を配した主庭が設けられている。建物に目を向けると、妻壁に柱と貫を表しとした社家特有の外観を確認することができる。

左手奥に進むと、東に向いて内玄関が設けられている。扉が設けられた開口部を囲む柱と梁の意匠は、ここでも鳥居の形を成している。玄関脇の外壁面に露出したガス配管が、このような歴史的建造物において現代生活では常識である設備、装置類を形態、或いは景観を保つ上での課題を示している。

この式台玄関から内玄関までの間の軒裏においては、垂木、野地板共にベンガラで朱く塗られた跡が今も鮮明に残っている。北側の主庭に面した軒裏には、その形跡が残っていないのはなぜなのか疑問が残る。後年になり式台玄関が使われなくなった時代以降は、通りの門から内玄関までのこの部分がメインアプローチ動線となったであろう。そのことを考慮すれば、意匠上、色合いなどを重視した装飾的な試みであったのだろうか。塗装仕上げという観点においては、前の4軒には見られなかった意匠である。



奥：ベンガラ塗りの軒裏



玄関内部、土間の部分には、式台玄関部分と同様に商いの場として使われている。漆で塗られた土台の下の差し石は、加工されていない自然石であることには変わりがないが、その形と寸法が一定ではない。他の山本家など比べてもそうであるが、同じこの家の式台玄関部分と比べても所見できるため、普請された大まかな年代や施工条件などを読み取ることができる資料とも言える。

建物の内部を見ると、ここでも今までとは少々異なる点を見ることができる。座敷の天井が床差しでないことである。一般的には特筆すべきことではないが、前4軒の座敷が床差しの形式を用いられていたため、敢えてここで触れておくことにする。

柱梁の軸組み材に比べて天井の材質が比較的新しいため、天井においては建築当初のままではなく、後年になり手を加えられた可能性もあるという所見も一部



床差しではない天井

あるため、その際に床差しを避けたのでは、というのが大工諸氏の推測でもある。先人によって、修繕、改修といった手が加えられた形跡が残っているということも長い歴史を経た建物である証である。一方で一部の垂れ壁においては、下端の鴨居が大きく下側へ湾曲している部分も見受けられた。長い年月による撓みであると思われるが、手を加えられた様子は見られない。こうした1ヶ所ごとの意味についても私たちの視点となりうる。

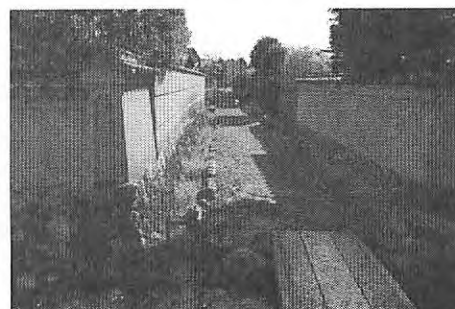
そしてこの屋敷で最も興味深いのは外部の庭である。建物から向かって北側が藤の木通りであるため、北側に鑑水を設けた主庭が設けられているが、同様の庭が南側にも広がっている。即ち、主屋が庭で挟まれていることとなる。南側の鑑水には現在は水が注がれていないが、取水のための水門や水路などが、敷地西側の小路の堀沿いに残っている。ここから引かれた水は、南側の鑑水へ注がれ、更に東南方向の下流へ繋がっていたとのことである。明神川の水は、藤の木通りに面した社家の庭の景観をかたちづくるのみならず、この地域一体、社家町の界隈の隅々にまで生活用水としても水路が廻らされていたとのことであるが、ここは、その痕跡でもある。



南側の庭

近年、事情により水を通すことを止められたとのことであるが、水が満たされていた往時は、南北にふたま続きの座敷のそれぞれの戸を開け放てば、両方の庭から水音が聞こえてくるような風情であったであろう。

南側の庭は、現在は既に現代の庭として手入れがなされており、新たな植栽も加わっている。池の形状などは昔からの構えを僅かに残すが、当初から鑑水を備



南側への取水口、及び水路

えた庭として造られていたのか、造園された時期や用途など北側の主庭との関連等については、ヒヤリング等では確認できなかった。

また、ここでも建物西側の手水の部分に、“竜の口”という排水施設の遺構が残っている。

取り入れる水と吐き出す水。言うまでもなく上賀茂の社家の住宅の大きな特徴を具現化したものである。



“竜の口”

## 8. 藤木家住宅

藤の木通りから太田神社への参道の途中に位置する。門は質素であるが、長く続く土造塀を眺めることで、敷地の広大さが伺える。

300 年近く前に建てられたとの説明を受けた。18 世紀初め頃という推定である。全体を見渡してみると、その割には、あまり手が加えられていないように思われる。古い風情が至るところに残されている。

門のすぐ近く、建物の南西隅に内玄関。その東側に並列して式台玄関が設けられている。

少し下がり全景を眺めると、柱と梁を表しとした妻壁を持つ上賀茂社家特有の外観を目の当たりにする。



南側妻壁

この建物は、間口が広いいため棟の位置が高い。そのため特有の妻壁を構成する柱、貫共にその数が多い。これは奥行き深い下屋と合せて、より一層、厳かな姿を表している。一部の漆喰が剥げ落ちており、そのこと自体が風情でもあるが、補修が成されれば、更に優美な姿になるとも言えよう。

内玄関内部の土間のみが少し改修されたようだ。ここに竈が置かれているが、まわり状況から判断すると後年のもののようであるが、これは神事である競べ馬と大きな係りがある竈であるとのこと。

中へ上がり奥へ進む。玄関の間と座敷奥の間の間に5畳の“中の間”が設けられている。この間取りは、この屋敷の特色でもある。「岩佐家」で見られた座敷西側の“脇の間”が思い出されるが。全体の間取りを見たところでは、前室的な用途の室と見るのが一般的であるが、「岩佐気」同様に、この座敷が能舞台として使われていたことにも関係があるようだ。

この中の間の北奥に小屋裏への箱階段が配置されている。小屋裏を広い収納として扱われている。京町屋では珍しくもないが、今までの社家住宅の見学では初めて目にするものである。棟の高さから考えると空間を有効に用いているだけのことであるが、建物のほぼ中央に階段が配置されていることなど、この空間を設けるに至った経緯など今後の解き明かしてもみたい。

座敷の床の間廻りは、今まで同様に奥行きが2尺弱と浅い。大きな曲線で面を取っている奥の土壁入隅の処理や磨かれた樺の地板、或いは地袋の敷居の面取りの小口処理など、ディテールが潇洒で、ある種のモダンさが感じられる。

また、上記の床の間も含めて、この座敷の全ての壁が水色、或いは青灰色で彩られている。

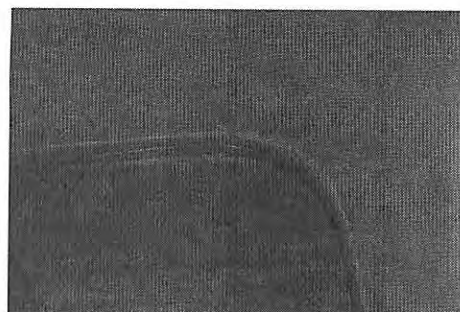
左官職人氏の注意を惹いたこの仕上げは、“浅葱”と呼ばれる土で施された壁である。鮮やかな色は、土自体の色である。着色によらない素材の色である。現在では入手が困難な材料であることは言うに及ばず、この壁自体が、貴重な建材資料とも言える。

さらにこの屋敷には、離れが建てられている。円形の地窓や網代の扉など意匠が豊富な離れであるが、この離れまでは、座敷の東南斜めの方向にあり、主屋と渡り廊下で繋がられている。また、前述したが、主屋の座敷は能舞台としても使われることがあり、その際には、この渡り廊下が、橋懸かりとしても使われたとのこと。

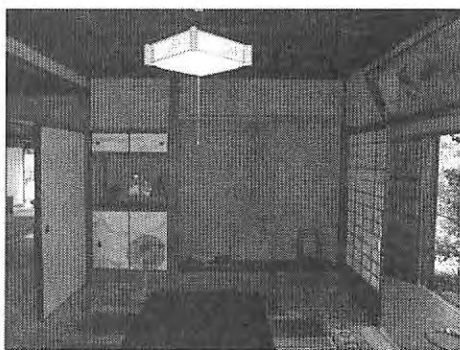
この渡り廊下は、檜皮葺きの屋根が架けられたもので、更に特筆すべき点がある。動線上の屈曲部では、屋根が谷折れとなる位置の垂木が3次元的に捻られた形を成している。この垂木を凝視すると、捻られも、曲げられもしていないことが確認できる。これは普請の際に所謂“現場合わせ”で、削り加工によって整形した木材だとのこと。大工職人氏による解説である。僅かな部分、しかも離れへ通ずる渡り廊下の部位でありながら、当時の職人の妙技を知ることが出来た。気づかないようであるが、遠く離れて見通すと、なるほどそれらの微妙な曲線で構成された天井面が美しい。木工芸術のような仕事の跡である。

外部を見る。この屋敷の庭には水の光景は見られない。座敷南側の主庭には、適度な大きさの庭石がなだらかな曲線を描いて並んでいるのがわかる。鍮水の跡であろうか。所有者からのヒヤリングにおいても、そのようなニュアンスが感じ取れる。しかし確証はない。

先の「津田家」の項でも記したが、文献では明神川の水は水網都市のごとく、社家町全体に行き渡っていたとのこと。この屋敷にも水路が繋がっていたのだろ



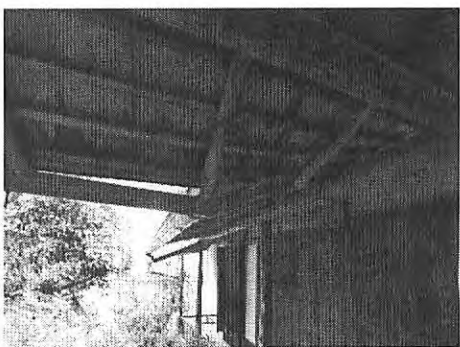
床の間入隅部\_\_左官による曲面処理



浅葱による内壁



渡り廊下から離れを見る



削り加工による湾曲垂木



うか。屋敷もそうだったのだろうか。西向きの流れであってもその水勾配の確保は難しいとされて言われており、藤の木通りから北向き、即ち山へ向かう方向となれば、当時の土木技術は如何に高度なものであったのか、今更ながらに驚かされる。

さらにまた、北側の廊下に面した手水の位置に、ここでも“竜の口”を見つけることができた。以前、「井関家」において、どのような位置に設けられたかという説明をいただいた。間取りを考える際に、どのような決め方が為されたのか、さらに興味がつきない。

庭中を散策すると、他にもそれらしきものを多く見つけることができた。時代を経ながら先人の知恵にならい、排水に相応しい場所、或いはそれを必要とする場所を探しながら確保したのであろう。地下部分での配管等の設備を備えていないことから、その脈を探し当てる技術とは、どのようなものであったのだろうか。このことにも驚かされる。

更に、その最たるものが台所の西側の外部勝手廻りに設けられた排水設備である。井戸のような形を成している。円形の穴で孔壁には石が積まれている。そこには、台所からの雑排水の配管が繋げられていた。いわば排水枡というものであろうか。

この屋敷の見学では、座敷横の間取り、及びその座敷が能舞台としての要素を持っていることなど、「岩佐家」との共通性を強く感じるとともに、回を増すごとに、木造建築の生命線のひとつともいえる「水」との対峙について、関心が高まるばかりである。



手水下部の“竜の口”



排水枡

## 9. 社家住宅についての可能性と必要性

以上、昨年、初秋から今夏にかけて6軒の見学の機会を与えていただいた。記述の内容については、私たちは新たに目にすることばかりであったが、多くの読者の中にあってはそうではなかった方も少なくないであろう。もうしばらく書かせていただくことと合せて、ご容赦願いたい。

わずか6軒の見学でありながら、私たちが感じたことは、非常に明快である。

先ず、外観については、ある一定の体裁が保たれているということである。町屋の場合ほど画一的で典型的な意匠はないと考えていたが、どの屋敷も表門をくぐりぬけてみてはじめてそうではないことを実感した。但し、町屋のように間口や高さや格子の意匠などの細かな決め事はなく、屋敷毎の連携、いわゆる町並みの形成とい点では、“ゆるやかな協調”といったようなものではないだろうか。



次に各屋敷ともそれぞれ自由な気風と手法で普請されているように強く感じる。賀茂氏の後裔という伝統と厳かな精神性といったものが根底にある上で、ある部分はきめ細かく、また、ある部分は遊びごころが含まれていたり、住空間として十分なほどバリエーションが豊かである。

3つめは、それらの工夫に満ちた普請のなかに、多くの謎やヒントが含まれるということ。

例えば、「井関家」の望楼3階の床の間に見られた鉾(ちょうな)による撲り仕上げの床框であるが、これは、偶然にも私たちが改修を検討している屋敷のうちの古いと断定している部分の床框とほぼ同じである。地板が乗るか乗らないかの違いは実は大きなことであるが、しかしながら、框部材そのものの表情は共通している。同じ手によるものか、或いは、何かの意味ある形なのか。今後、是非調べていきたい。

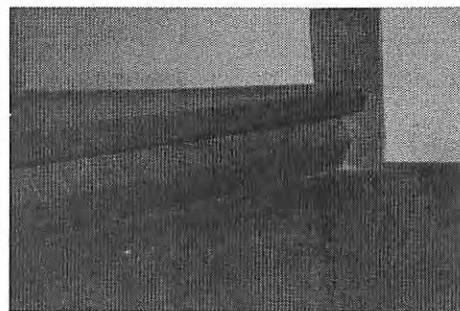
また、ほとんどの座敷で見られた天井の床差しに関してであるが、実際には他にも各地の史跡等に残されている。「ある時代までは、あまり気にしなかった」、むしろ逆に「古くは格式の高い家に用いられた」や、「忌み嫌うのは武家社会の話である」など様々な説があるが、私たちが当初は最後の説に近い考えを持っており、「社家と武家は異なるものであって当然」と考えていた。だがどうだろうか。本当の理由と社家住宅との因果関係などがわかれば面白い。

他にも、「梅辻家書院」縁側廊下の水勾配、「岩佐家」の土工事や基礎工事の技術的な理由、「井関家」で教えていただいた後、最後の「藤木家」に至るまで、各屋敷で確かめることができた排水技術の痕跡など、数多くの謎(=興味)が散らばっている。

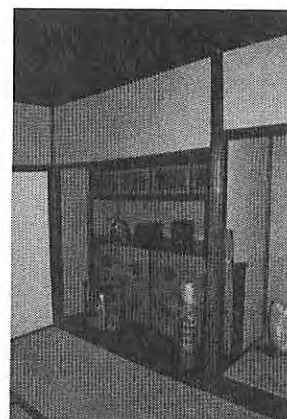
私たちは、これらのことを参考にして、社家の住宅を十分に理解した上で、まずは、機会を得ている屋敷の普請に少しでも取り込みたいと考えている。

同様にまた、今後、社家町の中での家づくり、まちづくりにおいて、お役に立つようなことが僅かでも示せればと考えている。そのためには、更に社家の町から多くのことを学ぶ必要があるが、社家文化を次世代へ伝えるという大きな意義において、私たちが微力ではあるが考えさせていきたい。

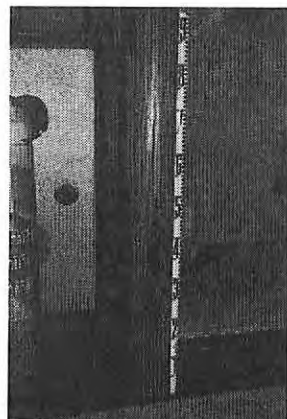
古い価値のある建物を残すということは、容易ではない。この文章のはじめの項で、“守られた”地区という認識を持っていたことを記したが、必ずしもそうではないことに痛感した。見



撲り仕上げの床框 井関家石水楼3階



“床差し” 岩佐家



“タケノコ”の計測 岩佐家

学させていただいた先々で、文化財、或いはそれらと同等の価値ある空間の中での日常生活における数多くの苦勞話を耳にすることができた。維持管理に関する手間や費用の問題である。そこには、僅かであっても是正のために手を加えるとなると手続きが容易ではないという問題も含まれる。今日の歴史遺産、特に伝統的建築という分野においては、単に保存という目的だけでは意味をなさないことは周知のことである。

何を“守るか”、何を“残すか”、何を“伝えるか”―住まいという機能を持つ建築が、生活の場であるということを忘れてはならない。従って、静態保存はありえない。

また、趣向を凝らした普請の文化であるが故、その価値を改めて見つめなおすことも必要である。

京町家が近年脚光をあびはじめて久しい。保存、活用のプログラムが多様である。保存のための調査、修復が行われているが、その費用の確保を多様な町屋の活用に求めている場合も少なくない。商家としての町家と、住いの場である社家とを同時に語ることはできないが、社家の町にも、暮らしの中に多種多様な面があっただろう。すぐきに代表される農産物との係りも特長ある風景を生み出したであろうし、何よりも古くから文芸、工芸に秀でた人物を排出し、歴史のあらゆる場面に所縁のあることは、これからのまちづくりにおいて大きな源になるに違いない。

その活力を社家住宅の保存と維持にもつなげるように考えなければならない。

## 8. おわりに

最後に、見学させていただいた6軒の皆様にこの場を借りてではあるが厚く感謝し御礼申しあげる。

また、上賀茂の社家にゆかりのあるかた、或いは社家文化について研究をされている多くのかたがたには、こうして今回好き勝手なことを寄稿させていただいたことにも重ねて御礼申しあげる次第である。私たちは、社家の町並み、或いは社家の住宅といった歴史的文化のなかに足を踏み入れることになったのだが、今回の一連の見学で、その認識を新たにすることができた。下手な文章ではあるが、私たちなりに感じたことをこのようなかたちで再びお知らせできる機会があればと重ねて願い、おわりとする。

■社家普請見学会構成

梅辻 諄 : 社家・梅辻家当主

※この見学会のコーディネーター役をお受けいただいた。

伊藤尚治 : 幹事 インテリアプロデューサー

渡邊照夫 : 大工職人

笹原光照 : 大工職人 数寄屋建築創作作家

浦辻鉄男 : 大工職人 数寄屋建築木工職人

島田勝基 : 鋳職人

土橋数夫 : 左官職人

吉田 充 : 植木職人

高野篤志 : 建築事務所所員

永松 尚 : 建築事務所代表（一級建築士）

京都精華大学デザイン学部建築学科講師

参考文献

①村上詔一、他編集

日本の町並み調査報告書集成 9 近畿地方の町並み 1 / 東洋書林 (2003)

②大山喬平 監修、石川登志雄、宇野日出生、地主智彦 編集 (2006)

上賀茂のもり・やしろ・まつり / 思文閣出版

③中川 武

日本の家 空間・記憶・言葉 / TOTO 出版 (2002)

④京都市資料

京都市指定・登録文化財一覧